特集 自己教育の源流

「教育原論」または「自己教育の思想」
江渡狄嶺の教育思想
自由大学論
現場からの発言

生きてる
生きてる
生きている
バリケードという腹の中で
生きている
毎日自主講座という栄養をとり
〝友と語る〟という清涼飲料剤を飲み
毎日精力的に生きている
……
生きてる
生きてる
生きている
今や青春の中に生きている。

（叛逆のバリケード』より）

「教育原論」または「自己教育の思想」

制作部／野本三吉

一九六〇年代後半から、各地で激発し、そして現在も尚、高校生の間にも飛び火し、引き継がれている、いわゆる「学園闘争」というのは、その本質部分に、既成の価値や思想を乗り越える新しい質と内容を孕ませていたと考えられる。それはおそらく「生活/思想」の全般にわたり、けっして一言では語りつくすことの出来ない深さと厚さを含んでいるのだが、ここでは、いわば「教育の原型」を模索する胎動だったのではないのか、という観点からとらえてみたいと思う。

知識そのものが商品化され、学歴そのものまでが労働力としての肩書きになり、身分格差を生みだす温床となっている現代の教育体制は、具体的な授業そのものをも腐敗させ、人間関係を枯渇させる。そして学生たちは、その牢獄のような校舎の中から「生きたい」という叫びをあげ、それが無数の輪となってこだまし奔流した。全人間的に自らを発動せしめ、肉体すべてを動員して生きること、生ききること、その生の燃焼をめざして学生たちの大学運動は起こった。学生たちはバリケードを築き、その中で自ら渇望していた「生きた学問」を求めて「自主講座」を開いた。

新たな自己を発見する喜びと、他者の中に自己を見る体験に学生たちは酔った。

けれども「日大闘争」「東大闘争」とのぼりつめていった「解放区」運動もバリケードも、自らの「生活」のないところでは、やがて消滅せざるをえない。

東大の「安田講堂」の攻防と、その崩壊は何かしら「学生運動」の限界と、新たな展開への発展を暗示した。

それは、「反大学」の構想も、自主講座の理論も、抽象的な「学問」の上だけではやがて崩れ去り、それが現実生活と結びつかないかぎり、定着した思想にはならない、ということなのかもしれない。いやそうなのだろう。その後の動きを見るかぎりでは、生活の「場」に根ざした活動のみが、風雪に耐えて息づいているように思える。

東大で開かれている公害を中心とした「自主講座」は、公害という現実的課題の中で、大学を解放し、各地の公害闘争をつつみ込んで成長した。同様に、東大駒場で根強く続けられている「連続シンポジウム」（別称、夜間大学）は、教育とは何かというテーマで二年間を生きぬいてきた。

しかし、これらの「自主（公開）講座」は大学の存在を肯定したところから、大学内に生活者を招き入れることによって成立しているところがあって、生活者自らが、自らの生活場面に於いて自主講座を結成してゆくという「自己教育」の本質には、まだ遠いのではないかと思う。大学進学を拒絶し、アルバイトで身を立てながら駒場の夜間大学に通い、事務局の仕事をしている会津君は、「今は、ここに来ているが、そのうち自分の働いている所で仲間たちと自主講座をつくりますよ。」と語っていたが、いわば、その時始めて自主講座は真価を発揮するのだと思われる。

又、東京工業大学の紛争の中から生み落とされ、川喜田二郎氏によって始められた「移動大学」の構想も、大学を捨てて「生活」の中へと、その場を移動したのである。

しかしながら、内部から、「移動大学は本気で問題解決を考えているのか」と批判が出るように、次々と場を変え、プロジェクトをKJ法を学ぶ手段としてゆく発想には、一つの限界があるようである。（「移動大学のスローガン」については、資料(1)を参照）

そうした意味から、もう一歩つき破れない何か、それを大正期に活躍した「土田杏村」の「自由大学運動」の中に見ようとするのはいささか古代趣味かもしれないが、この運動と論理には現在でも色あせない新鮮さが感じられるのは何故であろうか。

これは、福岡県伝習館高校の三人の教師（職を追われた）を中心にしつつ成立した「柳下村塾」の、いわゆる「塾」運動とも呼応する。そして、これは「サークル村」の残したさまざまの模索過程、あるいは現在でも無数に発生し、維持されている「サークル」運動の根ともつらなりあうのかもしれない。

例えば、伝習館高校の動きに刺激されつつ埼玉県川越市で、二人の教師の反戦活動に対する処分に反対し、「まもる会」を結成して共同の作業、学習をすすめてきた教師たちは、その過程で新たな関係の質を手に入れたのだが、その様子を次のように書いている。

「私たちの関心の中心としてあったことは私たちの間の人間関係の質の問題だった。日常のカサカサした関係、部分的にしか、かかわっていない人間関係の中で、守る会という場で、いかにしたら新たな全面的な人間関係をつくれるか、ということがもう一つのテーマとなってきている。ある種の共同体のようなもの、メンバーの一人によれば、それは団結小屋のようなもので『戦術会議の場であり、前線であり、相互教育の場であり、休養の場であり』ということになってきて『守る会を団結小屋に』という主張になってくる。三里塚の農民の間に生まれた新しい人間関係、生活化された闘いに強くひかれ、団結小屋にもひかれて、小川プロ『三里塚』を上映して酒をくみかわして話をしたのもそのためだった。さらに、そのような関心からも、三里塚の闘いを観に行った（今の私たちには、闘いに行ったとはいえない）。

このような運動の中で、私たちの間に一組のカップルが生まれたのは、だから偶然ではないと私は思っている。

最近、のんでダベルことが少なくなったこともあって、ひとつみんなで農場でもやらんか、なんていう提案に、すぐ飛びついてきてしまう。そんな関係なのだ。

損得ぬきで、いっしょに汗を流して作物をつくれるだけでもいいじゃないか、という風に話がすすんで『川越人民公社？』にしようなんて話がでてきてしまう。」（鈴木洋一）

こうした形で無数の「塾」が、「団結小屋」が誕生してくる時、土田杏村のいう自由大学運動は、実質的な担い手を発見したといえる

のだと思う。

ともあれ、学園闘争の提出した「自己教育」への刃は、とどまるところなく自己の内部につきたて、逆噴射する行動へとつきすすまねばならないということだろう。

ところで、これまで述べてきたことは、いわゆる自己にめざめたか、あるいはめざめかけている青年層に対して言えることであってそれよりも年少の、「子ども」たちの教育についての考察にはなりえていない。

しかし、この問題についても、激しく問題をつきつけている現実の動きがある。

それは、学生運動とも結合した三里塚農民の行動である。その中でも特に「少年行動隊」の行動形態は、「闘争に子どもを巻き込むな」という形で既成の教育に埋没していた人々に改めて「教育の原型」についての本質的な問いをつきつけたといえる。

それは、一言でいえば、親と子の真の連帯のあり方ともいえるし、人類史における継承の問題とも言えるかもしれない。

自分たちのたたかいが、子どもの目はもとより、誰の目をも恐れる必要のない正義のたたかいであるという確信が生まれ、その確信に加えて、自分たちの土地は自分たちの力で守る以外にはないのだという認識と決意を固めた時から、三里塚・芝山の農民たちは、親子連れ立って「戦場」（それは毎日そこで働き、生活しているおのれの生の原点に外ならない）に向かうことになっていった。

反対同盟の石井英祐さんは、

「わしらは闘争が始まってからは、夏休みといっても子どもを海に連れてくでもねえし、里帰りも思うようにできねえから旅行に連れてくこともしねえ。せめて闘争の現場へ一緒に連れて出て〝断絶〟をなくそうとしたわけだ。」と言うが、断絶をなくすために、闘争の現場へ連れてゆくというところに、三里塚の底辺に流れる農民魂の凄ごさがある。

そしてまた「断絶」を防がねばならないのは、農業における「断絶」とは、そのまま労働主体の分解を意味するからであり、生業の崩壊と直結するからである。

つまり、農業にとっては「家族ぐるみ」というのが日常生活における労働の常態なのであって、それを分解し、破壊して三チャン農業化してゆこうというのが、現代の資本主義の農業政策なのである。その意味で、三里塚の「家族ぐるみ」闘争というのは、農民を分断する弾圧に対する生活（労働）そのままからの叛逆といえるのである。

このことは、都市生活者が、とっくの昔に喪失し奪取されてしまった大衆のなかに潜在している共同体的思考と、民衆の連帯感に、あらたな照明をあてたといえなくはないのである。

「農民は、農民がもつ暮しの様相そのままで、もっとも開かれた、しかもラジカルな質を手に入れることができる要素をもっている。

三里塚の闘いが家族ぐるみだといわれるのは、都市労働者のストライキが家族ぐるみだというのとは次元を異にしている。

労働者家族の場合は、後方からの衝撃といった姿をまぬがれることができない。

それに比べて、農村では、定着の意志をもつかぎり、女も子どもも日常的に直接的であり、前線である。」

（「無名通信」17号　河野信子）

この地平に降り立つ時、日本各地の顕在的潜在的をとわず存在する土着共同体の本質としてのラジカルな思想、優しさ、教育の原型などについて思いをはせたくなるのである。三里塚少年行動隊の内部での人間関係には暖かくそして厳しい相互教育の糸が結ばれている。（この点については、資料(4)を参照して

ほしい。）

とすれば、各共同体の中で子どもはどのように育てられているのか。そして又、それが現在の「公教育」と、どのような形できっ抗してゆくのか。そうした関心と興味はつきない。そして、その課題にまともにとりくんだ一人の農民思想家、江渡狄嶺（幸三郎）を思い起こさざるをえない。

彼は農業生活の中に人間の根源性の存在することをつきとめ、自ら農民生活に投じ、「家稷農乗（かしょくのうじょう）」という共同生活体を築いたのである。

彼は自らの責任において、五人の子どもたちを公立学校に入れず、就学を拒絶したのである。

「子どもをまかせるにたる先生がいない、文部省の教育にも賛成できないということで、私たちを小学校にやらなかったそうです。

家庭で教育する方針で時間割も定めていたようですが、毎日の仕事と絶え間ない来客の接待に追われて予定は狂ってばかりいました」と、狄嶺の長女、不二さんは語ってくれたが、その顔には、却って両親に対する誇りさえ感じられた。

「教師」は来客の中から選ばれ、詩人の高村光太郎、水野葉舟、画家の中村不折、津田青楓などの教えをうけたという。

生活は貧しく、着るものも食べるものも粗末なものであったが「私たちは本当の生活をしているのだ」という自信があって、不二さんはどこにいても恥かしくなかったと言う。

狄嶺は、大杉栄、山川均などとも交流があり、社会運動家が逃れて、狄嶺の家にかくまわれることも多かったという。生活そのものの中で学習し、学んでゆくという狄嶺の教育理論は、現在、本質にもどって、その意味を充分かみしめなければならない時期にきている。それは、一人一人のおとな（親）が、自分の生活（生き方）に確信をもっていなければ出てこないことであって、混乱した価値観の中で、狄嶺のような信念をもって生きてゆけるのか、改めて考えてみたいと思う。

その意味で、狄嶺が「愛する子供達よ」として書きしるした文章の中に、教育の原型――人類史の伝達――の姿がクッキリと描かれていると思う。

現在、農業はかえりみられていないが、農民のもつ東洋的共同体の本質は、意識下の世界で生きつづけているのである。

「優しさに帰ろう。部落民と農民とに共通するこの破格の寛容と平静、それは幾世代をくぐりぬけてきた前プロレタリアートの感情であることを僕は理解した。この素焼の肌が放つ光を日本の労働者の前衛が充分に受けついでいないばかりか、むしろそれから背反しようとする傾向が強いというのが僕の発見だった。変革の中心であればなおさらのこと、労働者階級の意識高い部隊が失っているもの奪われたもの、人間性の欠損の部分を見落すべきではない……」（『原点が存在する』）

という形で十数年前に語った谷川雁の言葉がよみがえってくる。（資料(3)を参照のこと）

その意味では、忘れられた思想家としての安藤昌益に典型的にみられる「自然直営道」という日本型コミューンの原型は、さまざまな形で顕在化をはじめている。

擬制の共同性のヴェイルを内部から切りさき、人間と人間の間の紐帯である本源的共同性の、より新たな再生をめざすとすれば、とりあえず宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』のさし示す奥深い精神のユートピアを、そのコミューン志向をじっくりと胸に刻み込む必要があるかもしれない。

賢治自身、花巻農業高校の教師を辞して、羅須地人協会を作って、農村における共同体

志向をした時、そこには「地人」という語に示されるごとく「宇宙」との合体がめざされていた。その中で「土の学校」「大地の教室」「生命の学校」が育つはずであったのである。その意味では、沖縄の地に農業共同体を開始した「DIC」グループの動きは注目されるかもしれない。

「抑圧された人々のウラミを代行するにはそこに自分を置かねばならない。〝大学解体〟を叫ぶ一方で、学生の地位を確保し、エリートへの道を捨切れないギマン的幻想を、まず捨てなければならない。

大学をやめ、親、兄弟とも縁を切って農民に〝服務〟する。徹底した自己改造と自己犠牲を――。いたずらに内ゲバや過激路線をひた走るのは、オオカミのあせりに似ている。

セクトに埋没した既成の新左翼の時代は終わった。やがて、沖縄の各地に同様の根拠地を。そして、本土の農村にも……」（沖縄本部リーダー、千葉純一氏の言葉）

この主張がどこまで貫かれるかわからない。しかし、全共闘の運動をもっとも下降し、自らの生き方に重ねあわせようとする彼ら「DIC」の行動の中には、声高のスローガンを除けば、方向性の確かさが感じられる。（「DIC」の主張については、資料(2)を参照してほしい）

あるいは、今井、尾関両君を中心にして四月から正式発足する「備北共同体」、あるいはその他の共同体の動き。それらが、現在の危機を背負い、子どもたちを射程に入れた時、江渡狄嶺の提起した問題は、あらためてクローズアップされると思う。

今は、それぞれが自らの生命をとりもどすべく最もふさわしい生き方を非妥協的に行うことが必要なのかもしれない。その模索の一つとして、現場の教師をやめてキブツに渡り帰国して「新しき村」のメンバーに、更に、現在は「山岸会」に参画して「教育」の意味と実践を追いつづけている松村光子氏の発言は、共通の課題を投げかけるかもしれない。

あるいは、秋田の地で、「社会教育」の現場で粘り強く活動を続け、「村」という雑誌を発行し、「やまなみの会」の会員でもある福岡博氏の発言、及び、高校生として、「孤立」というミニコミ誌を発行しつづけている渡辺洋子氏の発言などは、参考になると思う。又、「世界連邦」の運動の中で、「教育者会議」をよびかけ、ついこの間、第一回世界連邦教育者会議を開いた市川英作氏の発言も、大切にされなければなるまい。

ともあれ、「教えることは不可能である」「真に個人の行動に影響を与える知識は、当人みずから発見し、わがものにした知識である」「すべての教育は放棄されねばならず、大切なのはなにかしらを学ぶことを学んだ人びとが集まることである」などの発想を生み出した学園闘争が、日常生活のレベルでどのような姿となって具現するのかは、今まさに問われているところなのである。

ここでは、人間形成の原点としての「認識構造」などについての考察は出来なかったがいずれ又、「キブツの教育」「共同体の中の子ども」などのテーマで徹底したほり下げを企てたいと思っている。この特集を組むに当って、狄嶺会の江渡不二、大西伍一さんにはさまざまの点でお世話になり、教えられることが多かった。又、「土田杏村」の研究家、上木敏郎氏には、杏村の自由大学論のコピーを送っていただくなど面倒をおかけした。改ためて感謝したい。そして、この協会の制作部の面々には言葉につくせない協力と援助を受けた。自らの道を更に進むことで、この好意に答えたいと思う。

× × ×

資料1

移動大学スローガン

(1)創造性開発と人間性解放

人間は、みずからの創造性を開発すべきだし、それを行ないえたときにのみ人間らしさをかち得て、それをつちかっていくことができる。

(2)相互研鑽

教師対生徒という旧来の両極分解的な考え方をしりぞけ、互いに教師であり生徒だという相互研鑽をすること。

(3)研究即教育、教育即研究

この両者を、別々で時には矛盾するものとするような旧来の考え方を捨て、両者を相互補足的な関係でとらえていく。

(4)頭から手までの全人教育

考えることと行動することが乖離した旧来の教育を捨て、頭から手までつながった全人教育を行なうこと。

(5)異質の交流

旧来のセクショナリズムを捨て、異質の交流をめざす。これが創造性を育てていく。

(6)生涯教育、生涯研究

旧来のように学校のみを教育の場と考えず、生涯教育をめざす。

また、学者のみを研究者と考えるのでなく、万人の生涯研究の姿勢を必要とする。

(7)地平線を開拓する

常に人類の第一線的な課題にいどむ。

そしてこういう第一線的な課題は、気をつければ誰の手にもとどくところにころがっている。

(8)雲と水と

文明の未熟なおごりを捨て、何ものにもとらわれず、自然の子として大自然に親しみ、雲の流れるように水の流れるように流れてゆく。

資料2

運動の停滞をどううちやぶるのか「DIC」

過疎地に我々の学校を!

再び東大解体の嵐を!

今度は本物を!

われわれは、あの主体的にえらんだ「学園闘争敗北」の時点に立ちかえり、そこから再構築をはかる以外に勝利への展望をもつことができない。

どうすればいいのか? もう一度バリケード封鎖をやるか。やればやるにこしたことはない。しかし、もう手のうちが知られすぎている。どういう人間がやれるのか、これをはっきりさせることが重要である。

なんのかんのといって、チャッカリ「大学」に居残っているような人間にはもう何もやりえない。これらは打倒の対象でしかない。

特にそういうのが「革命派」づらするのは下層大衆にとって迷惑千万なのだ。

同じ手はつかえない、とするとどうすればいいのか。

「学園闘争」とは何であったのかを問い返し、その本質をえぐり出し、その上でその質を継承し発展させる道をとらねばならない。

又、闘いうる立場を一人一人が獲得しなければならない。まず、いわゆる「68~69全国学園闘争」の本性をはっきりさせなければならない。

それは、一口にいえばブルジョア社会の基本原理に対する、日本資本主義史上初めての大胆な挑戦であった。

「ブルジョア社会の基本原理」とは何か。

人民の遺産の継承発展を専ら「専門家」が独占担当し、あとは「素人」としてその任から排除される関係、これである。

だから「専門性の高い能力」保持者がエラく、「専門性の低い能力」保持者ほどクズだということになる。だから、社会にあっては人は何か「専門」をもつことによって自分の存在意義を確認しようとするし、形だけでも「専門家」らしさを身にまとおうとする。

どんな下っ端でも例えば「道路工事の穴ほりの専門家」として自己確認しようとする。

一方は安定と名声でもって羽振りがよく、他方は不安定と侮蔑の中でみじめである。

しかし、観念においては、社会各特殊分野の専門家であるとして対等化させられる。

この観念はどこからくるのか。錯覚からくるのか? そうではない。

「専門家」が「素人」の英知をかすめとり、支配者が人民の英知をかすめとる。

この絶えざる強奪の関係を通じて、一方が強制し、他方が強制された観念である。

強制するのは羽振りのよい強者であり、強制されるのはみじめな弱者である。こういう強奪の関係を通じて、人民の遺産の集約、継承、発展は「専門家」の手や頭にゆだねられる。

この専門的能力の大小、専門的能力の有無、これがブルジョア社会の日々再生産される差別の根本原理であることは、在日アジア人、部落民、貧農、老人、子供、女性、中卒者、精薄、重症心身障害者等々に対する差別が必ずこの軸に還元されることをみれば、火をみるより明らかである。

このようなことは、特にさしたる「理論的分析」を加えるまでもなく、我々の日常的感覚がよく捕捉している事である。

「全国学園闘争」は「素人」の「専門家」「権威者」に対する攻撃、下層の上層に対する攻撃をその本質としたものであった。

ところが、事態が進行するにしたがって、同じ攻撃の手が「東大生」「大学生」に対して背後からのびることと相成った、というわけである。圧倒的大部分は、かつての被追求者の倒に逃げ込んだ。

「専門家」「権威者」「大家」に対する「素人」「クズ」「青二才」の攻撃、こういうもっとも鋭い質の闘争を、自己の身の危険に感づかずにやっていた時、これが全共闘運動の上昇期であり、その質を変化せしめて、〈人間として許せるかどうか〉というボケた人道主義に転じてから全共闘運動は敗退の過程をたどりはじめた。

われわれがもどるべきふり出しの質は、「専門家」に対する攻撃の質、「専門家」の再生産機構に対する解体行動の質である。

そういうわけで、「全国学園闘争」の真の質の継承発展者たらんとする者は、一定の立場の確立を必須条件として要請されている。

生活を下層化せしめ、上層に対して共存を許さぬ攻撃的な立場をとること。

これは必須要件である。自らの生活の安定をもとめ、親との衝突をさけるような立場では、この歴史的大任務は担えない。

「専門家」「権威者」を打倒せよ!

「やっぱり専門家は必要なのではないか」、上層がこういうのは、〈自分は有用だ〉という自信をもっているからであり、下層がこう言うのは、アキラメと絶望の表明なのだ。

「専門家」の鼻っ柱をたたきわれ!

「専門家」は、人民の遺産をかすめとり、排他的に独占し、遺産の質をゆがめている。

ブルジョア国家は、暴力装置をバックにし、こういう「専門家」の再生産機構を排他的に掌握し、人民から日々不断にその遺産をかすめとっている。人民の能力をつぶしつぶして

出る血を吸って生きているのが「専門家」であり、この「専門家」に依拠し、「専門家」を擁護し、「専門家」の再生産機構を排他的に掌握する暴力装置がブルジョア国家権力である。

「専門家」の再生産機構とは何か。公教育の機構である。東大を頂点とする公教育秩序がそれである。東大を頂点とする、ということとはどういうことか。

他大学は、いくらかの「東大度」の保持校としてのみ社会的に位置づく、ということである。高校も中学もそれに応じて編成されている。これは天下周知のことである。

だから「68——69全国学園闘争」というのは事実に反した呼称である。あれは全国における「東大解体闘争」であったのだ。

即ち、今日の「専門家再生産機構」の解体闘争であったのだ。

全国の「東大解体闘争」は「東大全共闘」なんかを盟主とするが如き基本的あやまりをおかしたが、幸か不幸か、そういうあやまりは事実によってあやまりたることが追認された。極く大ざっぱであるが、われわれは以上の如く考えている。

こういう総括にもとづいてわれわれは、真に日本の変革を志す人達に、次の方針を提起する。

■人民の遺産の真の継承者は「専門家」ではなく、これまで「素人」としてさげすまれてきた下層の人民大衆であること。

これらを実践的に確認していくこと。

具体的には、崩壊の危機にさらされている農村に蓄積されてきた人民の遺産と英知の継承者たるべきこと。

過疎化にさらされる農村にわれわれの学校をつくり、人民の遺産の集約、継承、発展をはかること。

学校をやめて農村、特に過疎地に下放せよ。

われわれは現在、沖縄本島で活動中。

同志をつのる。

資料3

農村と詩

谷川雁

僕の思考は次のように組立てられた。

(a) 日本の民衆の大部分は農民の出身である。だから日本の文明を蔽っているのは農民の感情である。農民は労働者階級をはじめ、すべての勤労階級に対して母親としての地位を主張することができる。

(b) 農民の感情は土地に結びついた生産にもとづいている。大地こそ人間感情の源泉であり、人間は大地の鏡にならなければならない。

(c) 進歩には土台となるべき根拠地が必要である。労働者は前プロレタリアートと、都会は地方と、世界は故郷とかたく結合しなければならぬ。

(d) しかるに労働者階級をふくめて日本の文明にはこの前プロレタリアート、地方、故郷から自己を疎外しようという欲求が強くはたらいている。

(e) それは日本の農民が上向きに発展して個人を確立してゆく道がとざされた結果、主観的に個人確立をめざすためであり、客観的なプロレタリア化の傾向に対して百八十度の錯覚をうんでいる。

(f) 日本の近代主義はすでに存在する近代の危機を救おうというのでなく、完全な形ではまだ存在しない近代を個人の手中に収めようとする願望である。

(g) これは大地から追い出された農民が客観条件に逆らって新しい心象風景にすがろうとする盲動であり、倒錯された農民主義である。

(h) 農民主義はその盲動性を内部にふくむ自然主義となってあらわれるのが常態である。つまり芸術上の自然主義と近代主義の間は裏表の関係にすぎない。

(i) 前プロレタリアートの盲動性を克服するにはプロレタリアートの組織性によるほかはない。だからその場合あくまで前者の発展的契機を継承しなければならぬ。その契機とは大地に結びついた深さに正比例する感性の領域である。

……（後略）……

（『原点が存在する』谷川雁）

資料4

自己教育機能の奪還

村田栄一

……「闘争が始ってから、同じ部落の下級生との関係が深くなり、前よりずっと話をするようになった。同じ目的を持った者同志行動しているから」と語った中学三年生の女生徒がいたが、このことは案外大きな意味を持っているとぼくには思える。

小学一年生から中学生までの混成で組織されている少年行動隊は、そこらへんにある「良い子」の子ども会が、大人のごきげんとりのためによくやる「どぶさらい」や「ラジオ体操」のような〈ままごと遊び〉ではなく、「われわれ大人に意見をする者は、子どもとは認めない」として見境なく弾圧する機動隊やガードマンと本気でたたかう〈実戦〉集団なのである。

その戦闘や準備作業、学習活動の過程で、年長者と年少者の緊密な交流と協力が自然に成立している。この交流がもたらす集団の自己教育機能に着目すべきではないかと思うのだ。学校制度の発達は、子どもたちを少なくとも10年から20年近くも〈学年〉という同一年令集団に縛りつけることになっている。

そのような均一集団への解体によって、教育効率は向上し、教育は近代化されたということになっている。

しかし、半面、そのことによって、村落共同体の中に一定の位置を占めていた「子ども集団」が持っていた年長者と年少者の相互交流という一種の教育機能が失われたことも事実である。

そして現代の学校教育が〈学年〉という同一年令層を、さらに〈成績〉＝〈進路〉によって細分し、バラバラな均一集団にしようとする方向をたどっていることを忘れてはならない。

〈多様化〉と呼ばれるその政策の行きつくところは、分断された子どもが〈教育〉への隷属のもとに、〈効率〉と〈競争〉を原則とするエコノミック・アニマルへと育てられていくことになるのである。

この〈多様化〉が、子ども集団に内在する〈自己教育〉機能の疎外を前提にして進行することを考えると、一見効率の悪いように思える「混成集団」のうちに、国家教育に対立して全体的人間を形成してゆく重大な契機を透視すべきではないかと考える。

とにかく、たたかいの中で自己変革をとげてゆく父母、老人、青年に伍して、子どもたちも少年行動隊という組織を通じてその〈共同体〉の一翼に加わりつつあることだけは、はっきり確認できるし、この〈自己教育〉機能の奪還こそ、反権力の実体にほかならぬことを強調しておきたいのだ。

（「少年行動隊は私たちに迫る」村田栄一〈朝日ジャーナル昭和四六年三月五日号〉）